

麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 獣医学科

職階 教授

氏名 藤井洋子

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・ 3 年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年

1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

役職担当：小動物外科学研究室担当、小動物診療部門構成員、獣医外科学特論等、大学院科目のコーディネーター

自分が担当している授業科目：自身はアメリカ獣医内科学会心臓病専門医の有資格者

（Diplomate of American College of Veterinary Internal Medicine (Cardiology)）である

が、座学として小動物臨床麻酔学、小動物心臓病学、実習として動物病院循環器科診療担当者として循環器科ローテーション学生に対する臨床教育、外科実習分野を担当している。

教師として何に責任を負っているか：獣医師として以前に、人としての誠実さ、人間力を備えることが臨床獣医師として知識よりも重要であることを伝えること

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
小動物獣医総合臨床I-IV	獣医学科	必	5	150
小動物病院実習	獣医学科	選	6	20
先端獣医療	獣医学科	選	6	30
獣医総合臨床実習（外科実習）	獣医学科	必	5	150
小動物臨床実習	獣医学科	必	5	150
基礎・小動物獣医総合臨床III	獣医学科	必	4	150
獣医学特論I	獣医学科	必	5	4
獣医学特論II	獣医学科	必	6	3
卒業論文	獣医学科	必	6	3
獣医外科学特論	研究科獣医学専攻	必	1	5
獣医外科学特別演習II	研究科獣医学専攻	必	1	1
獣医外科学特別実験II	研究科獣医学専攻	必	1	1
獣医外科学特別演習IV	研究科獣医学専攻	必	3	1
獣医外科学特別実験IV	研究科獣医学専攻	必	3	1

2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

獣医師としてプロフェッショナリズムを持ち社会貢献できる仕事をするために、科学的な思考を身に付けるとともに他者（臨床の場合は特にクライアント（オーナー）やスタッフ）とのコミュニケーションをとり、組織としてチームワークが構築できるように学生および獣医師を導くことが自分の目標である。

海外にも目を向け、自分でハードルを作らないよう意識改革を促すように心がけている。海外への壁を突破できるような、高い興味と向上心を持てるように学生・大学院生・研修医に伝えることも自分ならではの部分であると思う。

学部学生に対しては、獣医師として仕事をするためには今後どのような姿勢であるべきか、どのような思考回路が必要なのかを授業を通して伝える努力をしている。与えられる受け身の学習から脱却し、これまで学んだ基礎科目等の学問が臨床にどうつながるのかを考えるように促し、学生が能動的に必要な情報を自ら獲得しエビデンスに基づいて客観的に情報を組み立て直していくことができるようになることが私の目標である。

大学院生に対しては院生を一研究者として扱い、対等な位置でディスカッションすることを心がけている。院生へのインプットは自分の考えの押し付けはせず、自ら考え組み立てることが可能なようにレールを敷くような作業に徹するようにしている。研究を「楽しい」と感じてもらえるような興味の引き出しに成功し、私がレールを敷かなくても自分で進んでいけるようになることが大学院教育の私の目標である。

3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

獣医師としてプロフェッショナリズムを持ち、社会に貢献できる仕事をするためには、科学的思考を身につけることが不可欠である。同時に、臨床の現場では特にクライアント（オーナー）やスタッフとの円滑なコミュニケーションを図り、組織としてのチームワークを構築することも重要である。私は、学生や若手獣医師がこれらの力を養えるよう導くことを自らの目標としている。

また、海外にも目を向け、自ら可能性に制限をかけないよう意識改革を促すことを常に心にかけている。海外へのハードルを取り払い、高い興味と向上心を持続けられるよう、学生・大学院生・研修医に伝えていくことも私の役割の一つであると考えている。

学部学生に対しては、獣医師として活躍するために必要な姿勢や思考回路を授業を通じて伝える努力をしている。受け身の学習から脱却し、これまで学んできた基礎科目が臨床とどのように結びつくのかを自ら考えられるよう促すことが重要である。その上で、学生自身が主体的に必要な情報を獲得し、エビデンスに基づいて客観的に情報を整理・統合できるようになることを目指している。

大学院生に対しては、一研究者として対等な立場でディスカッションを行うことを心かけている。私の役割は、考えを押し付けるのではなく、院生が自ら思考し、研究を組み立てられるような環境を整えることである。研究の楽しさを実感してもらい、最終的には私の手助けがなくても自ら進んでいけるようになることが、大学院教育における私の目標である。

（1）アクティブ・ラーニングについての取組

有

小動物臨床実習では、まず簡単な質問を投げかけ、その回答を通じて学生の理解度を把握し、個々に合わせたテーラーメイドな指導を心かけている。また、単なる見学にとどまらず、学生が能動的に考える機会を持てるよう配慮している。

卒業論文の指導においては、こちらから一方的に課題を与えるのではなく、まず学生自身の関心のあるテーマについて問いかけ、自らリサーチを行うよう促している。その後、ディスカッションを重ねながら、さらに深くテーマを探求し、研究プロトコルの策定へと進めるよう指導している。

（2）ICTの教育活用

有

学部学生向けおよび大学院生・研修獣医師向けのジャーナルクラブはオンラインで実施し、資料はクラウドにアップし参加者がいつでも閲覧できるようにした。

4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

(1) 教育（授業及び実習等）の創意工夫

B

病院実習では、学生それぞれの興味や実習への熱意に応じて、内容やディスカッションの深さを調整しながら進めた。今年度の学生が受け身の傾向が強く、双方向性のやり取りに難儀した。

V4基礎・小動物獣医総合臨床では、疾患に関する授業をまだ受けていない学生に対し、病気の動物に麻酔をかける必要性を説明する場面があったため、学習の順序を考慮したカリキュラムの見直しを行った。試験では、単なる暗記では解答できない問題を出題し、臨床に必要な生理学・薬理学・解剖学の復習を促すよう工夫した。国家試験においても、単なる暗記からの脱却を求める傾向が強まっていることから、今後もこのような出題方法を継続したいと考えている。

(2) 学生の理解度の把握

B

病院実習では、奨励の所見や客観情報について簡単な質問を促してもなかなか答えてくれる学生がおらず、理解度の把握が十分ではなかった。他の方法を取ることも難しく、日本人学生に合った方法を模索しなければならない。

(3) 学生の自学自習を促す工夫

A

上記に記載したが、試験では単なる暗記では解答できない問題を出題し、臨床に必要な生理学・薬理学・解剖学の復習を促すようにした。

(4) 学生とのコミュニケーション

A

メールで質問があった場合は、場合によっては対面で解説した。

(5) 双方向授業への工夫

B

一方的な症例の解説ではなく、臨床検査結果についてどう考えるのか問いかけるといったことを心がけた。

（６）国家試験対策の取組（獣医学科・臨床検査技術学科）

A

今年度はV6総合獣医学の授業担当から外れたことから、V5、V4の授業における取り組みは以下の通りである。

V4の授業では、国家試験に出題された内容であることを具体的に伝え、重要な項目について意識させる様な工夫をした。前述のごとく、国家試験は暗記だけでは解けない問題が多いことから、勉強の仕方の意識改革になる様に、授業内容の背景にある基礎科目（生理、薬理、解剖など）がどのように臨床獣医学に繋がっていくのかを考えさせるようにした。

V5の病院実習においては、過去に出題された疾患に遭遇した場合は国家試験で取り上げられた疾患であることを伝え意識させ、合わせて国家試験では外せないポイントを口頭で伝えることを心がけた。ただし、国家試験のためだけの、試験対策授業にならないように、自分はいくまで臨床獣医師として誇れる仕事ができるような職業人を輩出できることも意識している。国家試験の予備校にならないようにしたい。

5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

（１）授業評価アンケート結果の授業への反映

担当している授業がオムニバスであり、自分に直接的な評価がなかったことから、この設問には答えられない。授業評価ではなく、研究室学生に直接試験の難易度や授業について感想聞いたりし、それを参考にした。

（２）（１）の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

研究室学生の意見からは、改善すべき点は見出せなかった。

（３）（２）を踏まえた次年度の取組

同様な対応をしたい。

6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

（１）現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

暗記に頼るのではなく、理論から理解し、応用できるように授業を構築した。

卒業論文においては、教員が初めから課題を与えるのではなく、学生が自身の興味のある分野からどのような研究が考えられるかを主体的に思考するよう促した。そのうえで、学生自身がまずリサーチを行うことを重視し、行き詰まった場合には適切なヒントや情報を提供しながら導くよう努めた。その後、再度ディスカッションを重ね、研究プロトコルの立案から進行までを双方向の対話を意識しながら進めるようにした。今後もこれを継続したい。

（２）（１）の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

- ・ 担当する大学院生がJournal of Veterinary Medical Scienceに研究成果を公表した
- ・ 担当する大学院生が、American College of Veterinary Internal Medicine annual meetingの口頭発表に応募した
- ・ 卒論担当した研究室学生（V6）が、日本獣医循環器学会で口頭発表を行った
- ・ 附属動物病院特任副手が、獣医麻酔外科学会で口頭発表を行った

7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

私の教員としての役割は、入学者を増やすことではなく入学した学生がプロフェッショナルズムにあふれた獣医師になるようにレールを敷くことである。したがって高校予備校からの情報や入学者の確保に関するFDに時間を費やすことは非効率であると感じる。一方で、大学教育に有用と考えたFDについては積極的に参加したつもりである。診療業務に時間を費やすことが多いことから、見逃し配信を引き続き希望する。

8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

短期目標：担当する大学院生が、興味領域において銀の弾丸になりうる成果を上げ小動物循環器病学に貢献できるようにサポートしていくこと。

学部学生については、状況を冷静に観察し、集めた情報から問題を解決していく応用力を身につけられるような教育をすること。

※EBMだけではなくNarrative-based medicineも学生、研修医等に伝承すること。具体的には、科学的なディスカッションだけではなく、オーナーに傾聴したり経済的な背景を考えたり、臨床ではEBM以外のことも考えなければならない現場感を伝えたい。

9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

シラバス，レポート課題，試験問題，教材（配布資料，パワーポイント資料）

FDプログラムへの参加記録

授業に関する学生からの質問のメールのやり取り